

連載：原点

「数学が苦手になった経験を生かして」

君津高等学校 三上 舞

小学校5年生のとき、学級担任の先生がつけてくださったあだ名が「歩く計算機」でした。クラスメイトの中で、算数の問題をいつも1番に解き終えていたからです。このことを誇りに思っていましたし、これから先も勉強を頑張っていこうという励みにもなりました。

中学校に入学すると、今まで算数が得意だった友達が次々と苦手意識を持つようになりました。私は歩く計算機の名に懸けて、数学の問題は全て答えることができるようにと取り組んできました。そのおかげで、テストが近くなると、友達に数学を教えるのが私の役割となっていました。できなかつた問題が解けたときに見せてくれる友達の笑顔が大好きで、数学の教員になりたいという気持ちが生まれました。

高校に入学すると、これまでとは打って変わって、学習内容もかなり難しくなり課題の量も増え、授業に追い付けなくなってしまいました。誰よりも何よりも得意であった数学ですが、次第にテストでは自分が思っている以上に点数が取れなくなってしまいました。解き方を友達に聞いても、何が分からないのか分からない、なぜそうなるか、なぜそうするのか分からないという状態になり非常に辛い気持ちになりました。このときになって初めて、勉強につまずいた人の気持ちを理解したのです。そして、今までの自分の教え方は、数学の問題が解けない人に対して、問題が解ける自分の姿をお披露目するだけの場であったのではないかと反省しました。

このような経験から、高校の数学の教員になることを決めました。得意だった数学につまずいたことで、教える際に相手はどこでつまずきそうになるのか、どのような言い方をしたらわかりやすいかを考えていく必要があることに気付いたからです。

当たり前のことかもしれませんが、私が授業をする際には、生徒が理解に苦しみそうなところを見つけ、それをどのように教えていくかという視点で教材研究を行っています。数学が苦手な生徒には、私も数学が苦手だった事実を伝え、ともに学ぼうという姿勢で毎日の学習に取り組んでいます。また、生徒から難しい過去の入試問題を質問されるときもありますが、生徒が授業で学習した内容と関連付けて解答をわかり易く、そして深く理解してもらうように努めています。その姿を見せることで、生徒にも学び続けることの大切さを伝えていきたいと思っています。

「教員になって」

市川工業高等学校 山中 敏一

私の夢は「教員になってサッカー部の顧問になり全国大会に出場する」ことでした。この夢は中学3年生のころから抱いていました。そのために、1年間の浪人生活を経て、東京学芸大学教育学部中等教員養成課程数学科に入学しました。大学4年間で教員になるために必要なことを学び、今年の春教員人生をスタートすることができました。市川工業高等学校ではサッカー部の顧問を担当させていただいているので、私の夢の一部を叶えることができるとてもうれしく思っていると共に新たな挑戦にわくわくして毎日過ごしています。

しかし、ここ市川工業高等学校では私が今まで経験したことがない事がたくさんあり困惑することがあります。例えば、「サッカー部員が11名」、「割り算や分数がわからない」、「半額と50%引きは違うと思っている」、「中学生時代あまり学校に行っていない」、「男子だけのクラスがある」などと挙げたらきりがありません。数学の授業では、毎日小学生レベルの話から高校生レベルの話までする必要があるので、幅広く教材研究をしなければなりません。どうして高校で小学生の内容を教えなければいけないのかと考えてしまう時もありました。

しかし、私は毎日が充実していると感じています。なぜなら、授業においては「先生の授業はわかりやすい」と言ってくれる生徒がいるからです。このことは私にとって自信になります。授業中も積極的に発言してくれるので、私自身授業を楽しく行うことができます。本校では、基礎学力が足りない生徒たちが少なくありませんので、高校数学の内容に対しどのように興味を持たせるかが重要であると思います。そのため、数学と私生活を関連付けられるように日頃からアンテナを張って生活するようにしています。その結果、授業で生徒の反応がよかったときには言葉にできないほどの充実感を得ることができ、授業は楽しいと感じています。今後は、私だけではなく生徒も「数学の授業は楽しい」と思えるように努力していこうと思います。サッカー部においては、厳しいことを毎日言われながらもそれにしっかりついて来ようと必死に努力してくれる部員達があります。何よりもうれしい事は、他の職員の方々が「最近のサッカー部いいね」と言ってくださる事です。まだまだ改善することは山のようにありますが、少なくとも良い方向に進むことができているのかなと実感しつつ、私自身も成長していきたいと思います。

知らない事ばかりで毎日が挑戦の日々ですが、自分の夢を叶えるために努力してその挑戦に打ち勝っていきたいです。生徒達のために、私が学んできたことを伝えていき、彼らの成長を助けていきたいと思います。

「スタートラインにたって」

松戸南高等学校 五十嵐 裕和

松戸南高校に赴任して5カ月がたち、学校の雰囲気にも少しずつ慣れてきました。ようやく教員人生が始まりました。

私が教員を目指そうと思ったそもそものきっかけは、高校の頃の担任との出会いでした。その先生の授業ではいつも「先生自身が数学を楽しんでいる」、そんな雰囲気が感じられました。初めのうちは、どうしてそんなに楽しいのか、とても不思議に思いました。しかし、授業を受けていると、不思議と私も問題が解けるようになり、更に数学の楽しさを感じ、考える面白さもわかるようになっていきました。私もそんな風に、自分自身が楽しむことで、生徒へ数学の楽しさを伝えたいと思いました。

昨年一年間は情報の T.T. として非常勤講師をしていました。三部制の定時制高校であり、様々な事情を抱えた生徒たちの学び直しを支援する学校でした。ここでの経験は、教師としての関わり方を深く考えさせられました。それは授業での個別対応の役割が大きいことです。授業中に「きれいな字だね」、「よく覚えていたね」などの何気ない声かけだけでも、生徒たちはもっと頑張ってみようという気持ちを示し、前よりも集中して学ぶ姿勢を見せてくれたように感じました。私からすれば何気ない発言でも、生徒にとってはそれが学びに繋がるきっかけにもなるのだと思いました。学ぼうとする生徒の気持ちを少しでも感じ取り、導き支援する、そういった一人ひとりの個に寄り添う指導がいかに重要であるかを感じました。

今年、松戸南高校に決まった時、前任校と同じ三部制と聞いて驚きました。少しは経験を活かせると思いましたが、授業形態の違いなどがあり、大変に感じる事が多くあります。私は数学 I、数学 II の担当ですが、生徒の理解度は様々です。特に基本となる計算練習などは、個別に指導することも求められます。それだけでなく、数学的な考え方を教えることも考えると、時間の配分をしっかりと考えた授業づくりをしなければならぬと感じています。計算と、概念の理解とは、どちらも重要だと思いますが、前期を振り返ってみると、数学的な考え方を伝えるほうに時間を多く割いていたように感じます。理解して、実際に計算ができるようなバランスのとれた授業づくりをしていくことが、これからの私の課題であると思います。

高校時代の担任や職場での様々な出会いがあったからこそ、こうして充実した毎日を送れているのだと思います。このことに感謝して、これからも生徒一人ひとり(の個)を大切に、寄り添った指導をしていきたいと思っています。さらに来年度からはクラス担任になり、今まで以上に生徒と関わる機会が増えていくと思います。今年度は、授業や生徒との関わり方について先輩の先生方から少しでも多く学びながら、これからの指導についてしっかりと考えていきたいと思っています。